研究基礎科目

メディア表現研究Ⅰ

担当：赤羽亨・赤松正行・大久保美紀・金山智子・桑久保亮太・小林孝浩・小林茂・鈴木宣也・平林真実・前田真二郎・松井茂・山田晃嗣・菅実花・飛谷謙介・立石祥子			
単位：2単位	履修対象：1年	履修区分：必修	授業形態：講義
学期：前期	実施方法：オンライン	教室：W301 講義室	

授業の到達目標及びテーマ

博士課程における研究は、学生自らが研究課題を設定し進めていく際に、メディア表現分野に求められる研究倫理に基づいたテーマと計画が必須である。論文例や研究方法、評価方法等を示しながら、論文作成に求められる研究の枠組みや解析技法をはじめとして、調査・研究手法全体を俯瞰する。特にメディア表現という視点で広く社会や世界を見つめ「問い」を立て、その問いへのアプローチ手法を検討し、結論へと計画的に描く必要がある。本授業では、博士後期課程初期段階における研究の基礎的なあり方に対する概論であり、メディア表現に対する深い洞察と新たな知見を獲得するための教育課程やスケジュールの確認を起点として、自身の研究テーマを確認し、研究を進めるための方法構築の全般の修得を目標とします。

授業の概要

博士前期課程から研究能力をさらに発展させるため、各自のテーマに基づいて進められる研究視点から、さらに学際的・国際的な視点に立った研究活動を自立して推進できる研究遂行力を養い、ならびに質の高いメディア表現へ向けた研究方法を理解する。また、論文作成に求められる手順を理解し、文献検索や研究事例の収集、仮説設定と理論検証、考察手法等、論文作成方法を修得する。なお、領域横断的に相互に深く関連するものであることから、多様な事例の修学を狙い教員がオムニバス方式で開講する。

授業計画

- 第1回ガイダンスと研究倫理（松井茂）
  - 博士課程の教育課程と研究スケジュールを確認する。また、研究を進めるうえで必要となる博士課程のコンプライアンスや研究倫理、行動規範を理解する。
- 第2回メディア表現研究のねらい（鈴木宣也）
  - テーマに基づくメディア表現研究をより明確にイメージするため、研究の本質である「問い」と領域横断性とその再組織化について理解する。
- 第3回～第5回メディア表現研究と理論化の概観（大久保美紀・山田晃嗣）
  - メディア表現研究に関する仮説の設定と、具体的な実践を基にした表現手法の検証など、表現研究と理論研究の相関的プロセスの過程で行われる、自らの研究の概観をまとめ、理論に裏付けされた表現について考察する。

- 第6回～第8回研究・分析方法の概観（平林真実・松井茂）
    - 博士課程に求められる研究工程を具体的に想定するため、テーマの設定、仮説設定、事例・文献調査、実地調査、分析方法、評価方法を理解したうえで、自分がどのような工程で研究を進めるべきか考察する。
- 【第9回～第15回】は、メディア表現に関する領域横断について、各担当が多様な研究事例を示し、メディア表現研究について考察する。
    - 第9回メディア表現に関する領域横断（1）メディア・アート（桑久保亮太、赤松正行、立石祥子）
    - 第10回メディア表現に関する領域横断（2）イノベーション・マネージメント（小林茂、飛谷謙介）
    - 第11回メディア表現に関する領域横断（3）インタラクション・デザイン（鈴木宣也、赤羽亨）
    - 第12回メディア表現に関する領域横断（4）コミュニケーション・システム（小林孝浩、平林真実）
    - 第13回メディア表現に関する領域横断（5）イメージング・メディア（前田真二郎、菅実花）
    - 第14回メディア表現に関する領域横断（6）メディア・コミュニケーション（金山智子、山田晃嗣）
    - 第15回メディア表現に関する領域横断（7）アート・セオリー（松井茂、大久保美紀）

教科書・参考書等

指導に際して必要となる参考書・参考資料は適宜紹介する。

学生に対する評価

授業への取り組み、レポートなど、総合的に判断する。

メディア表現研究Ⅱ

担当：赤羽亨・赤松正行・大久保美紀・金山智子・桑久保亮太・小林孝浩・小林茂・鈴木宣也・平林真実・前田真二郎・松井茂・山田晃嗣・菅実花・飛谷謙介・立石祥子			
単位：2単位	履修対象：1年	履修区分：必修	授業形態：演習
学期：後期	実施方法：オンライン	教室：W301 講義室	

授業の到達目標及びテーマ

博士後期課程の研究において、各自の研究を理論的に思考し客観的に文章化するために、本授業では博士後期課程初期段階における研究の進め方の理解を目的とする。また、メディア表現に対する深い洞察と新たな知見を獲得するため、自身の研究テーマとプロセスについて演習を通じて確認し、研究を進めるための方法構築全般の修得を目標とする。そこで（1）研究テーマと論文との関連づけ、（2）各自のテーマに基づく理論的な研究方法についての調査、（3）論文の構成についての検討、といった流れを通じ、領域横断的視点を重視しつつ、論文執筆に向けての基盤を作ることを目標とする。

授業の概要

博士前期課程から研究能力をさらに発展させるため、「メディア表現研究Ⅰ」にて修得した研究の基本的な進め方からはじめ、各自のテーマに基づく研究の視点から、さらに学際的・国際的な視点に立った研究活動を自立して推進できる研究遂行力を養う。ならびに質の高いメディア表現へ向けた研究方法を演習を通じて理解する。メディア表現の論文作成に求められる手順を理解し、文献検索や研究事例の収集、仮説設定と理論検証、考察手法等、論文作成方法を演習を通じて修得する。

授業計画

- 第1回ガイダンス
- 第2回～第3回テーマの探求・発見および背景の調査
- 第4回～第5回先行研究と研究分析
- 第6回～第7回研究テーマと論文計画の提出と議論
- 第8回～第10回研究調査・分析方法、表現手法の選択と考察
- 第11回～第13回理論・体系化と実践計画
- 第14回～第15回論文構成と研究方法

各自の研究に即した教員の研究テーマを選択し履修する。各教員の研究テーマは次のとおり。

（赤羽亨）

インタラクションデザインに焦点をあて、デザインプロセスにおいて重要となる「プロトタイピング」に関連して、メディア表現技術の体系的な習得やデジタルファブリケーション技術を活用したプロトタイピング手法など、メディアテクノロジーを使った表現手法やインタラクションの記録について教授する。

（赤松正行）

自転車を始めとする自律的な移動を主題としてテクノロジーとアートを融合させた実践的な調査・制作と発見的な批評・論考に対して、各種の環境感応技術、拡張現実感技術、映像音響体感技術などを用い、個人の身体性や創造性、社会の交換性や持続性、自然と機械の相互作用性や創発性などについて教授する。

（大久保美紀）

高度情報化社会におけるメディアは、芸術的表現を充溢させると同時に、凡庸化・均質化した。授業では、ソーシャルメディア、没入的プラットフォーム、セルフィー、ファッション、ゲームなどの具体的経験について、芸術ー非芸術、虚構ー現実、身体ー非身体の二項対立を乗り越える両義的視点から評価し、メディア表現を考察するための理論や方法論を教授する。

（金山智子）

高度情報メディア社会において、他者との関係や意味の構築プロセスを（不）可能とするコミュニケーションを規定する媒介・場としてメディアを捉え、既存のメディアコミュニケーション論を現代社会の中で相対化し、新たな理論や方法論、メディア実践からこの問いについて教授する。

（桑久保亮太）

メディア技術と世界の関係性を考察するため、客観的な事実認識とともに、個々人が抱える問題に積極的に目を向け、尚且つそれを社会に接続することで共有・共鳴させる方法を具体的に探求することが求められる。ここではメディアアートを個別の問題を普遍化する活動のひとつの方策として捉え教授する。

（小林孝浩）

情報システムの継続的な発展がもたらす不可逆的な影響を省みつつ、現在の社会環境において技術の適正なあり方や技術に依存しすぎない人間や生活のあり方をテーマに、情報システム工学に専門の軸足を置き、それらの応用研究に関して教授する。

（小林茂）

まず、古典から最新の国際標準に至るまでイノベーションの定義がどのように変遷してきたか背景と共に学ぶ。次に、経営学等の知見を参照しつつアイデアの創出から実装に至るまでの課題と手法について学ぶ。その上で、中小企業、スタートアップ、メディアアーティストなど限られた資源で実行した事例を詳細に分析し実践に向けて教授する。

（鈴木宣也）

メディア技術とそれがもたらす影響をテーマの主軸に捉え、ビジュアルリテラシー（創造）やインタラクションデザイン（設計）、プロトタイピング（実践）などを含むデザインプロセスに関する発展研究について、情報メディアとデザインの可能性と課題をホリスティックな視点から俯瞰的に教授する。

（平林真実）

様々なメディアおよび時空間上で構成されたコミュニケーションを、機械学習等を用いた分析から、実世界インターフェイス、Webシステムを含む基盤に対し、多様な状況に適したコミュニケーションを拡張するシステムを例に、実時間性を担保した実践的な実現手法を教授する。

（前田真二郎）

デジタル技術と結びついた「映像」は、従来の映像表現だけでなく、印刷や通信などのメディア環境や、美術や舞台といった芸術分野に大きな影響を及ぼしている。映像の発信／鑑賞形態の変化が生んだ新たな視覚文化を見据えながら、新旧の映像メディアに関する技術や表現を整理し、今日の映像表現について教授する。

（松井茂）

20世紀後半のメディアをめぐるインフラストラクチャーの変化を踏まえ、現代芸術を文化現象として再配置し、作家像、作品概念の変化を検証する。マス・メディアを介してはかられる領域横断が、制度化された芸術諸分野を解体し、抵抗文化として、ラディカルな表現上の戦略をいかに設計してきたのかを抽出する。

（山田晃嗣）

安全・安心なネットワークというインフラと、情報の価値を高める分析手法を用いて、各ユーザに個別対応するための一手段として情報技術を考える。そして、それらをどのように現場へ取入れて行くべきかを福祉の視点で捉え、情報インフラ、情報分析と共に情報技術のあり方について教授する。

（菅実花）

メディア技術の進歩により変遷する表象文化と社会に焦点を当て、近代以降の芸術史をふまえて、視覚表現を対象にその背景にある歴史的・社会的文脈を掘り下げるとともに、個々の制作者・鑑賞者の体験を相対化し、「問い」としてのアートの実践を探求する方法論を教授する。

（飛谷謙介）

機械学習をはじめとする人工知能に関する諸技術を新たなメディア技術として捉え、それらの数理的な側面だけでなく、技術の進展と供に社会に形成されうる価値観について検討する。そのため本講義では、数理統計学の歴史を紐解き、諸技術に通底する確率的・統計的な感覚、およびその社会的展開、特に表現領域との接点について教授する。

（立石祥子）

テクノロジー、芸術、文化、都市、建築といった横断的な要素から構成される人びとの体験を一連の〈出来事〉として捉え、〈出来事〉の持つ形式に着目することで、複合メディア時代における複雑な体験を解体／分析し、統合／理論創出することを目指し、それを可能とするメディア論およびメディア研究の視座から思考するための理論と方法論を教授する。

履修上の注意

主・副研究指導教員とよく相談し授業計画を立てること。

教科書・参考書等

指導に際して必要となる参考書・参考資料は適宜紹介する。

学生に対する評価

授業への取り組み、レポートなど、総合的に判断する。

知的財産権特論

担当：狩野幹人（非常勤）			
単位：1単位	履修対象：1年2年3年	履修区分：選択	授業形態：講義
学期：前期	実施方法：オンライン	教室：W301 講義室	

授業の到達目標及びテーマ

広く知的財産権全般の知識を学び、研究・制作活動と知的財産との関連や、大学・企業における知的財産権の取得・活用について理解を深めることで、知的財産制度の基礎的及び専門的知識を習得すると共に、研究者、芸術家、実務家として知っておかなければならない注意点などを習得する。

授業の概要

知的財産権に関する基本的な考え方や国内外の法律・制度、研究・制作活動の成果である知的財産の意義、大学・企業での先進的な知的財産の活用事例等について講義する。また、身近な発明のアイデアに基づく特許創出や、先行技術調査を学ぶ。さらに、社会やイノベーションにおいて知的財産およびマネジメントの果たす役割、研究倫理と著作権、安全保障と知的財産について解説する。

授業計画

- 第1回　ガイダンス／知的財産・知的財産権とは
- 第2回　イノベーションと知的財産・知的財産権
- 第3回　特許制度
- 第4回　意匠制度
- 第5回　商標制度
- 第6回　著作権制度
- 第7回　研究倫理と著作権
- 第8回　経済安全保障と知的財産・知的財産権

履修上の注意

主・副研究指導教員とよく相談し授業計画を立てること。

教科書・参考書等

指導に際して必要となる参考書・参考資料は適宜紹介する。

学生に対する評価

課題レポート提出およびその評価。